

動くことは学ぶこと そして繋がること Funの原動力

自ら動くことは、
すべての子どもの権利

子どもたちが光り輝ける社会へ

のびのび育ちの会 2026.9.10

理学療法士 高塩純一





びわこ学園医療福祉センター草津

(第一びわこ学園 大津市神出開町260)



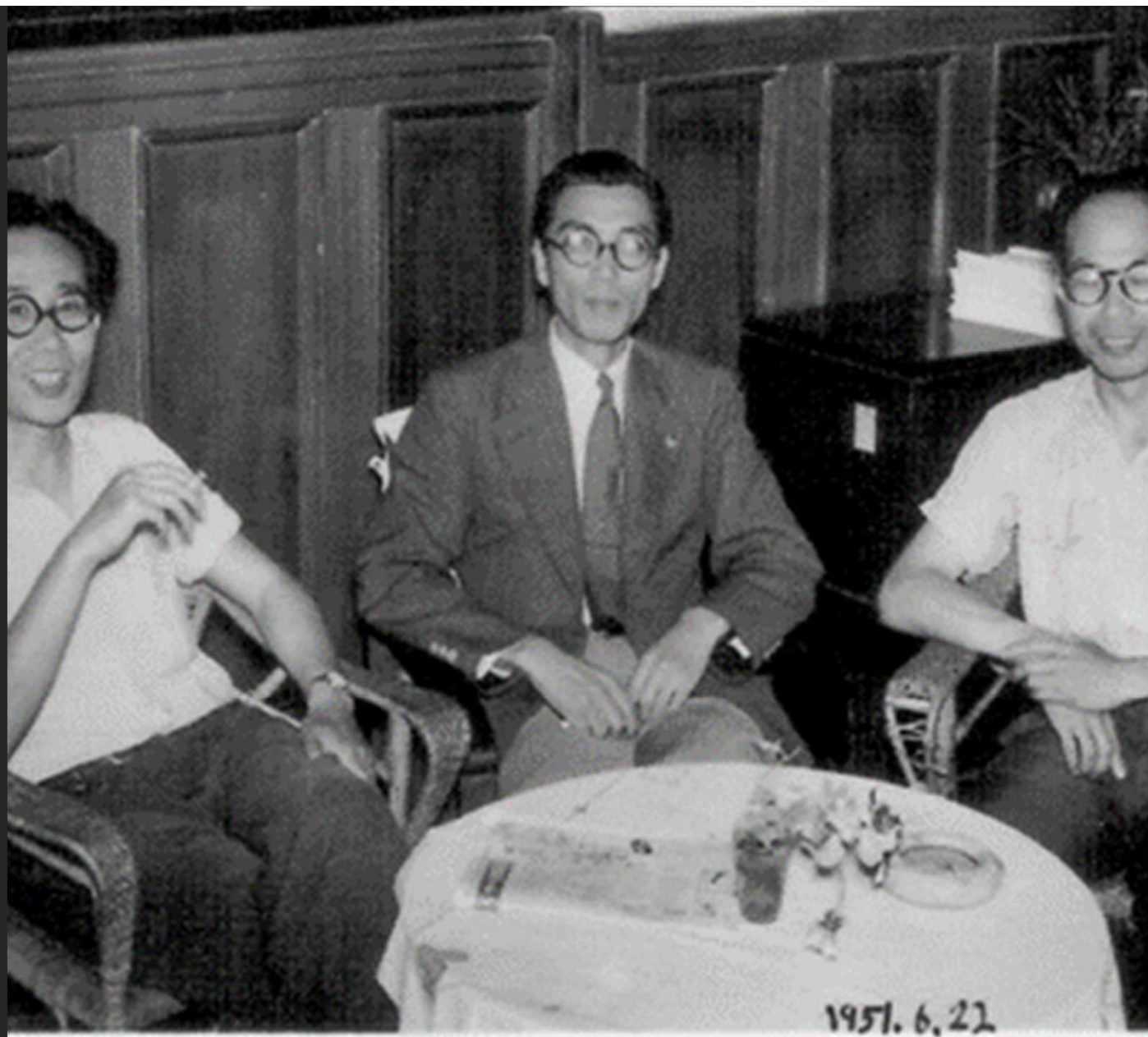
発達保障の提起と提唱

「身体的、精神的な不幸を一身に担って生まれてきたこの子どもたちにも、幸福に生きる権利があることを、私たちは全力をつくしてその生命と発達を保障していきたいと思う。

それがこの世紀に課せられた使命のひとつであると確信している。」

『糸賀一雄著作集 第Ⅲ巻251ページ』

1963.6.執筆



糸賀・岡崎思想に おけるKey word

四六時中勤務

耐乏生活

不断の研究

本人さんはどう思てはるんやろ...。

熱
心
願
冷
静



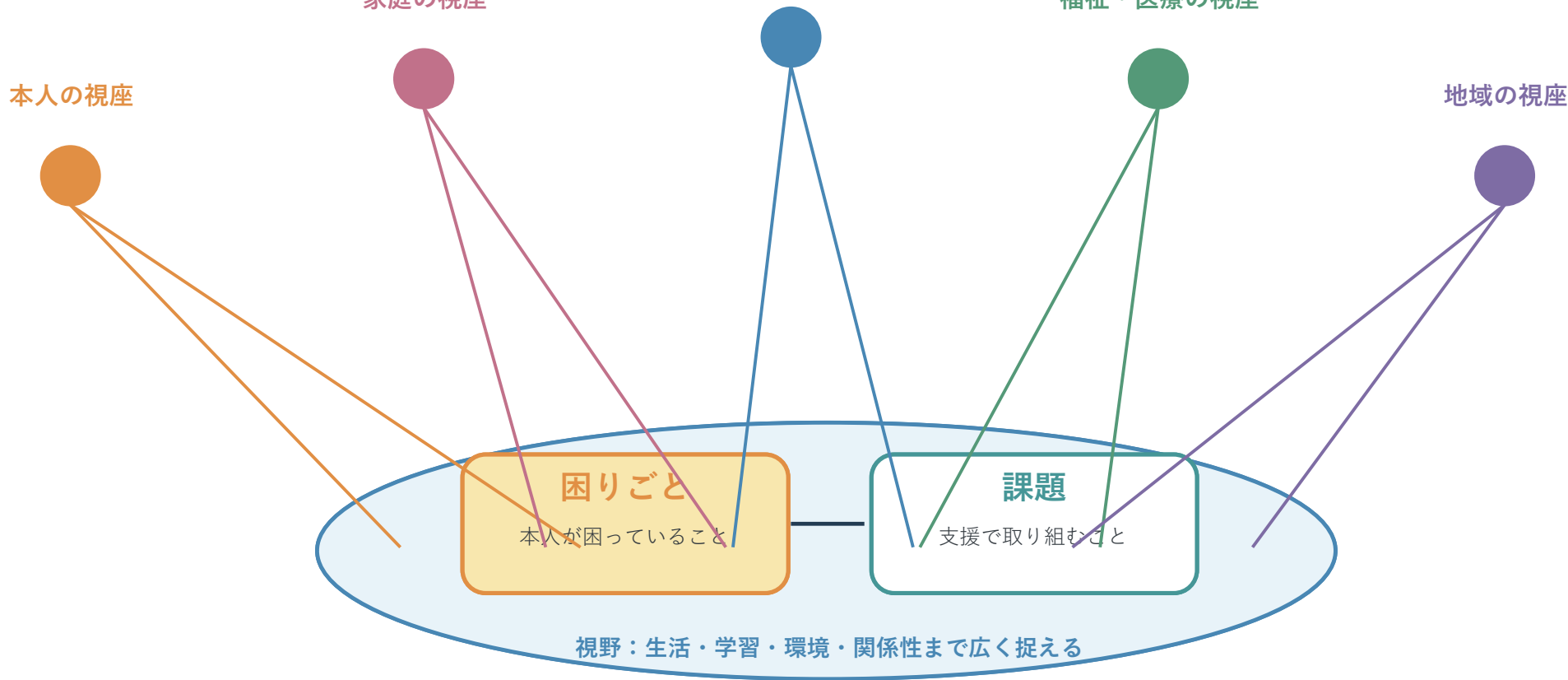
人智学(シュタイナー)

どんなに「正しい内容」のことを主張しても、外面的に「良好な結果」が出ていたりしても、その主張の仕方や実際の行動の仕方、つまり取り組む「姿勢」が、**独善的**であったり、**排他的**であったり、

時代状況にそぐわないものであったりすれば、それは、もうどこかが「正しく」はない。

複数の視座から見ると「困りごと」と「課題」が見えてくる

困りごととは子どもが経験していること。課題は、その困りごとを軽減するために支援側も含めて取り組むこと。



視座（コーンの頂点）を変える → 視野が広がる → 困りごとの背景が見える → 支援課題が見える

例：「授業中に席を離れる」から、困りごとと課題を整理する

表面的な行動をそのまま課題にせず、複数の視座・視点から「本人は何に困っているか」を探る。

視座	視点	見えてくる困りごと	見えてくる課題
本人	感覚・理解・意思	音や人の動きがづらい／課題が分からない／休みたい	刺激を調整する／分かる提示にする／休憩を選べるようにする
家庭	生活・安心・体調	睡眠不足や疲れがある／見通しがないと不安	生活情報を共有する／安心できる見通しをつくる
教育	環境・学習・参加	課題量が合わない／座って参加する方法しかない	課題量・座席・参加方法を調整する
福祉・医療	発達・健康	感覚特性や体調が活動への参加に影響している	特性や健康面を踏まえた環境調整を行う
地域	居場所・関係	安心できる人・場所・活動が少ない	安心できる居場所やつながりを増やす

ポイント：「席を離れること」そのものを課題にせず、本人の困りごとと環境との関係から支援課題を設定する。

児童発達の動作学

ケネス・S・ホルト 成瀬悟策 訳編 1978 P4

重力と早期運動発達 P4

重力は見ることができない。したがって、この強力な力の重大な影響力を見おとしやすいのである。

（中略）

生まれてからずっと、重力はわれわれのすべての運動に影響している。

（中略）

幼児の初期的活動のほとんどは確固とした姿勢を重力の影響に抗して、達成し維持することである。



小児の姿勢

小児の姿勢（改訂第3版）
有馬 正高/北原 侑【著】
診断と治療社（2012/05）

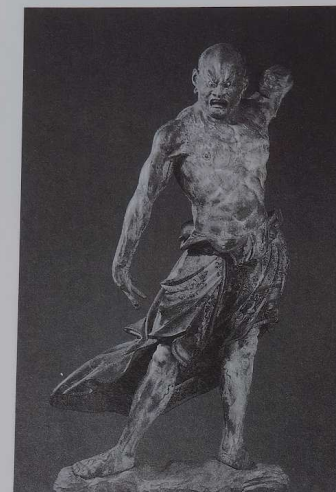


図15 「木造金剛力士像」阿形像にみられた ATNR の“構え”（興福寺）



図16 「風神雷神図屏風」雷神にみられた ATNR の“構え”（建仁寺）

つの証拠である。ただし、頭部回旋が十分起こった時点での ATNR の姿勢の増強は否定しない。

4 彫刻、絵画のなかでの非対称性緊張性頸反射と同一姿勢

姿勢の構え(股位)は四肢の関節角度での組み合わせで表現できる。しかし日常生活のなかで、一つの姿勢をみた時、姿勢全体からわれわれが受ける印象はもっと感覚的で情緒的なものである。姿勢の構えは、関節角度の組み合わせ以上の内容を付加しており、躍動的だ、美しい、危なっかしいなどと感じさせる。

図15は興福寺にある木造金剛力士像である。顔面側の上肢は伸展位、後頭側は屈曲位で ATNR の構えを示している。この金剛力士像からは、躍動的で力強い印象を受ける。顔の表情や筋肉の盛り上がりだけからこのような印象を受けるのではなく、顔面・体幹・四肢の相互関係、すなわち ATNR と同一姿勢が加味されて、躍動的で力強い印象を強めている。さらに伸展側の手指の様子は、指先まで力がみなぎっている威圧感を与えている。しかし、この手指の様子は、アテトーゼ型脳性麻痺でよくみる肢位でもある。この金剛力士像をみた時、脳性



EXPLORATION IS FOR EVERYONE









ぴょんぴょん

ぱんぱん

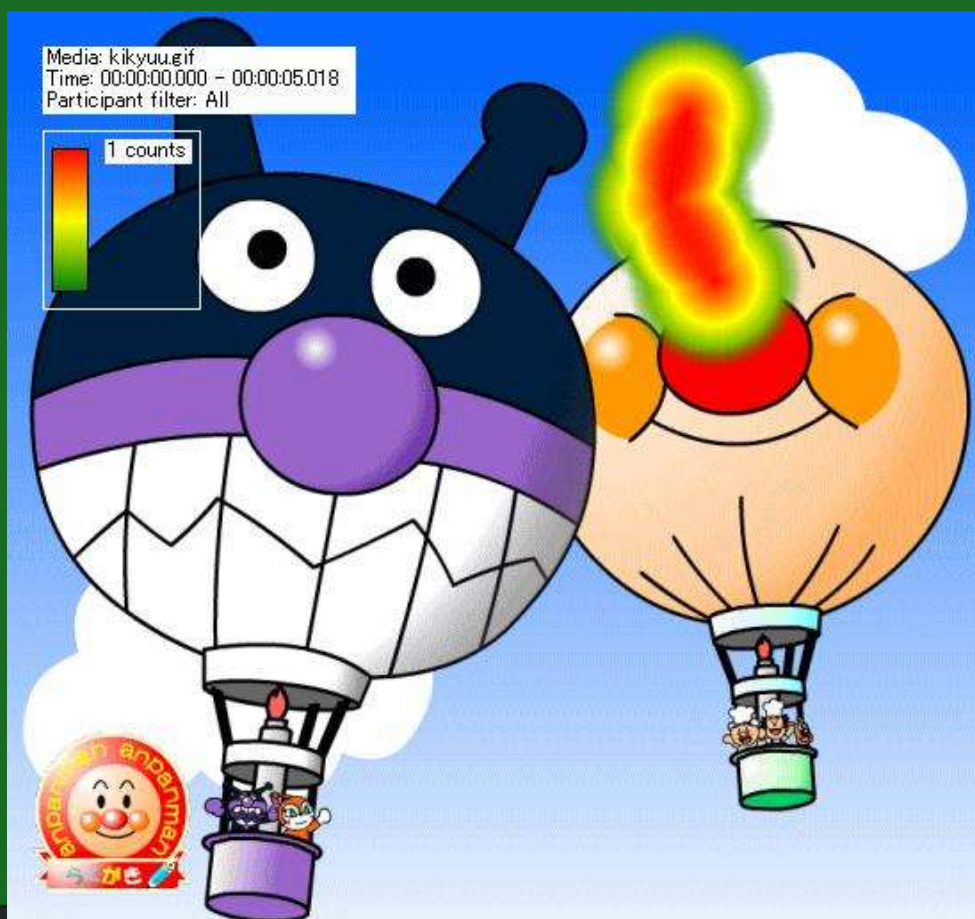
の

背景にある文脈

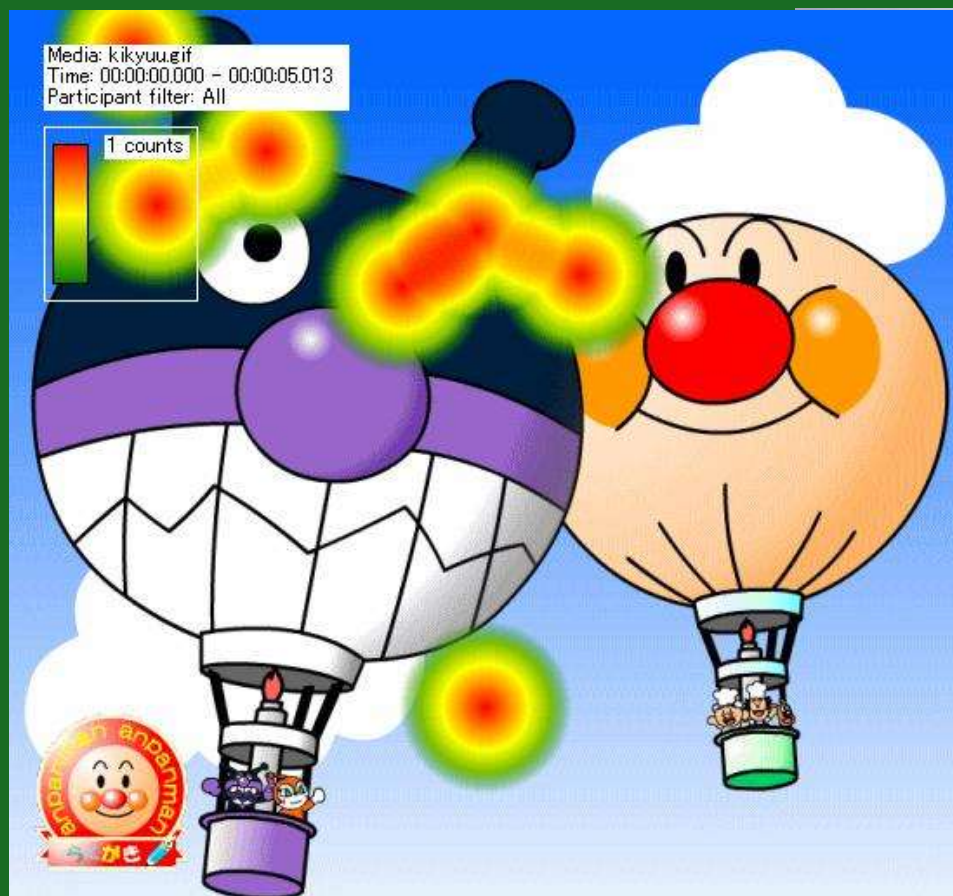
咲来沙ちゃん



咲来沙ちゃん2008.10.16. 訓練前



咲来沙ちゃん2008.10.16. 訓練後 Heat map



咲来沙ちゃん 訓練後 2009.2.9.



物語の中で自分たちを見る

こどもたちを外から眺めるのではなく

支援（お手伝い）という物語の中で自分たちを見つめる



足に力が入らなくても ブランコに乗れるよ

与謝の海支援学校の篠原勇先生は、Spiderのベルトを用いることで筋力ゼロでも立ちこぎブランコに乗れる方法を考案しました。

こどもたちにとって座ってブランコを漕ぐことと立漕ぎををすることは雲泥の差があります。



TARGET ARTICLE

Travel Broadens the Mind

Joseph J. Campos
*Institute of Human Development
University of California–Berkeley*

David I. Anderson
*Department of Kinesiology
San Francisco State University
Institute of Human Development
University of California–Berkeley*

Marianne A. Barbu-Roth, Edward M. Hubbard, Matthew J.
Hertenstein, and David Witherington
*Institute of Human Development
University of California–Berkeley*

The onset of locomotion heralds one of the major life transitions in early development and involves a pervasive set of changes in perception, spatial cognition, and social and emotional development. Through a synthesis of published and hitherto unpublished findings, gathered from a number of converging research designs and methods, this article provides a comprehensive review and reanalysis of the consequences of self-produced locomotor experience. Specifically, we focus on the role of locomotor experience in changes in social and emotional development, referential gestural communication, wariness of heights, the perception of self-motion, distance perception, spatial search, and spatial coding strategies. Our analysis reveals new insights into the

Supplementary materials to this article are available on the World Wide Web at <http://www.infancyarchives.com>.

Requests for reprints should be sent to Joseph J. Campos, Institute of Human Development, University of California–Berkeley, Tolman Hall, Berkeley, CA 94720–1690. E-mail: jcampos@socrates.berkeley.edu

Joseph J. Campos

移動経験は、発達の推移を決定するものではないが、説明することができ、運動経験は、その人の環境との経験を劇的に変化させる。





昭和30年代のリハ（コドモックルの昔）

こどものリハビリテーションの 歴史、理論的背景と ダイナミックシステム理論の後

北海道文教大学 医療保健科学部
リハビリテーション学科
理学療法学専攻 横井裕一郎



**Peter Rosenbaum
(Clinician-Scientist)**

CEREBRAL PALSY: The Six 'F-Words' for CP

1



FUNCTION I might do things differently but I CAN do them. How I do it is not important. Please let me try!



2 FAMILY They know me best and I trust them to do what's best for me. Listen to them. Talk to them. Hear them. Respect them.

3



FITNESS Everyone needs to stay fit and healthy, including me. Help me find ways to keep fit.



4 FRIENDS Having childhood friends is important. Please give me opportunities to make friends with my peers.

5



FUN Childhood is about fun and play. This is how I learn and grow. Please help me do the activities that I find the most fun.



6 FUTURE I will grow up one day, so please find ways for me to develop independence and be included in my community.

 **CanChild**
www.canchild.ca

World Cerebral Palsy Day
worldcpday.org

Proudly supported by The Allergan Foundation

Based on Rosenbaum, P. & Gorte, J.W. (2012). The 'F-words' in childhood disability: I swear this is how we should think! Child: Care, Health and Development, (38) 4. Visit <https://www.canchild.ca/en/research-in-practice/f-words-in-childhood-disability> for more resources.







家族は私のことを一番よく知っていて、
私にとって一番いいことをしようとしてくれているの。

だから、話を聞いてあげて。そして、話して、また聞いてあげて。
家族のことを尊重してあげて。

こんなもの出来ないかなあ～
PCSSのアイデア
ブリコラージュ野生の思考



2004

PCSSを用いて のActivity



第2回 新・赤ちゃん学国際シンポジウム

－赤ちゃんの可能性を探る基調講演－

2003年12月2日(火)

ハイハイという移動経験がもたらす影響として

Prof. Campos

1)空間定位 2)隠したものを探せる 3)指さしや視線の先を見る(言語獲得の基盤の共同注意の発達) 4)姿勢の視覚的コントロール 5)高さに対する恐怖などを挙げています。

自ら動くことは、周辺視野からの情報が増え、姿勢制御に視覚情報が関与し、社会的参照や情動的コミュニケーションが増え、認知機能の発達を促すことにつながります。



障がいのある赤ちゃんが移動経験を獲得することで指さしや視線の先を見る課題が 12%から 50%改善した。行動を変えるのは年齢ではなく経験である。移動は発達を促すものではあるが、発達を生じさせるものではない。

自らの力では移動が困難なこどもたちに対して、電動移動機器を用いてでも移動の経験を行うことはニューラルネットワークの構築を促すためにも、定型発達児が移動経験を開始する時期から開始することが重要であると考えられる。

Prof. Joseph Campos

内山伊知郎教授



Prof. Lisbeth Nilsson.
Prof. Cole Galloway



#2: Rehab requirements: Social Mobility



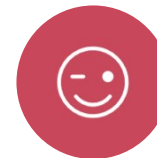
Early



Every Behavior



Everywhere



For Everyone



With Everyone



All the time

身体に不自由のある子どもたちの場合・・・



身体に不自由のある子どもたちは、思うように体を動かすことができません。



そのことは、身体を知覚することだけにとどまらず、対人的相互作用や社会性の発達にも多大な影響を及ぼします。



その観点からすると子どもたちにとって動くことは、Social Mobility であり、心の発達を育むためにも重要であります。

いつから始めますか？

一人での移動の重要性



自己によって生産された移動は認識的で心理社会的な発達における極めて重要な役割を果たします。

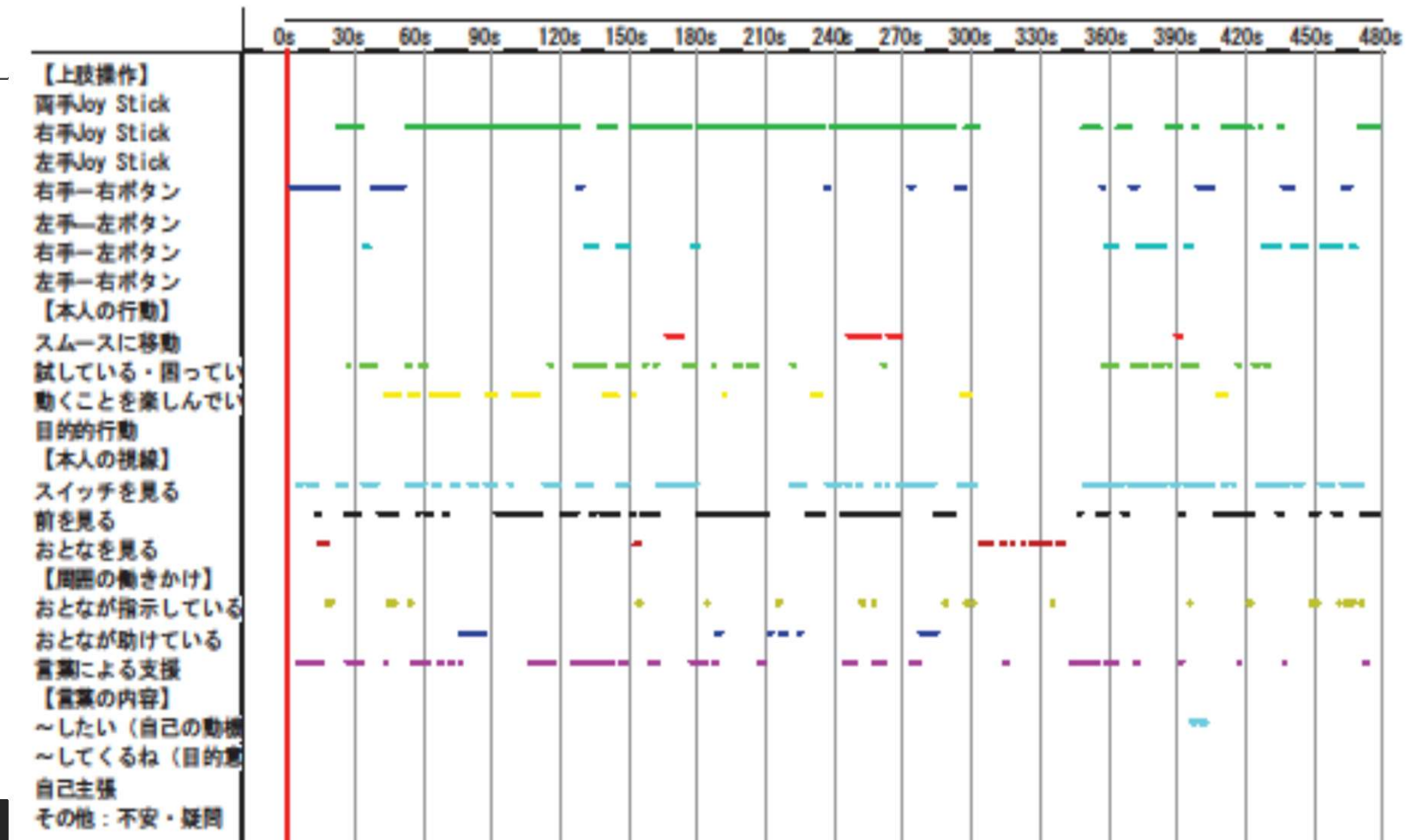
CamposやGallowayは生後7ヶ月から開始。



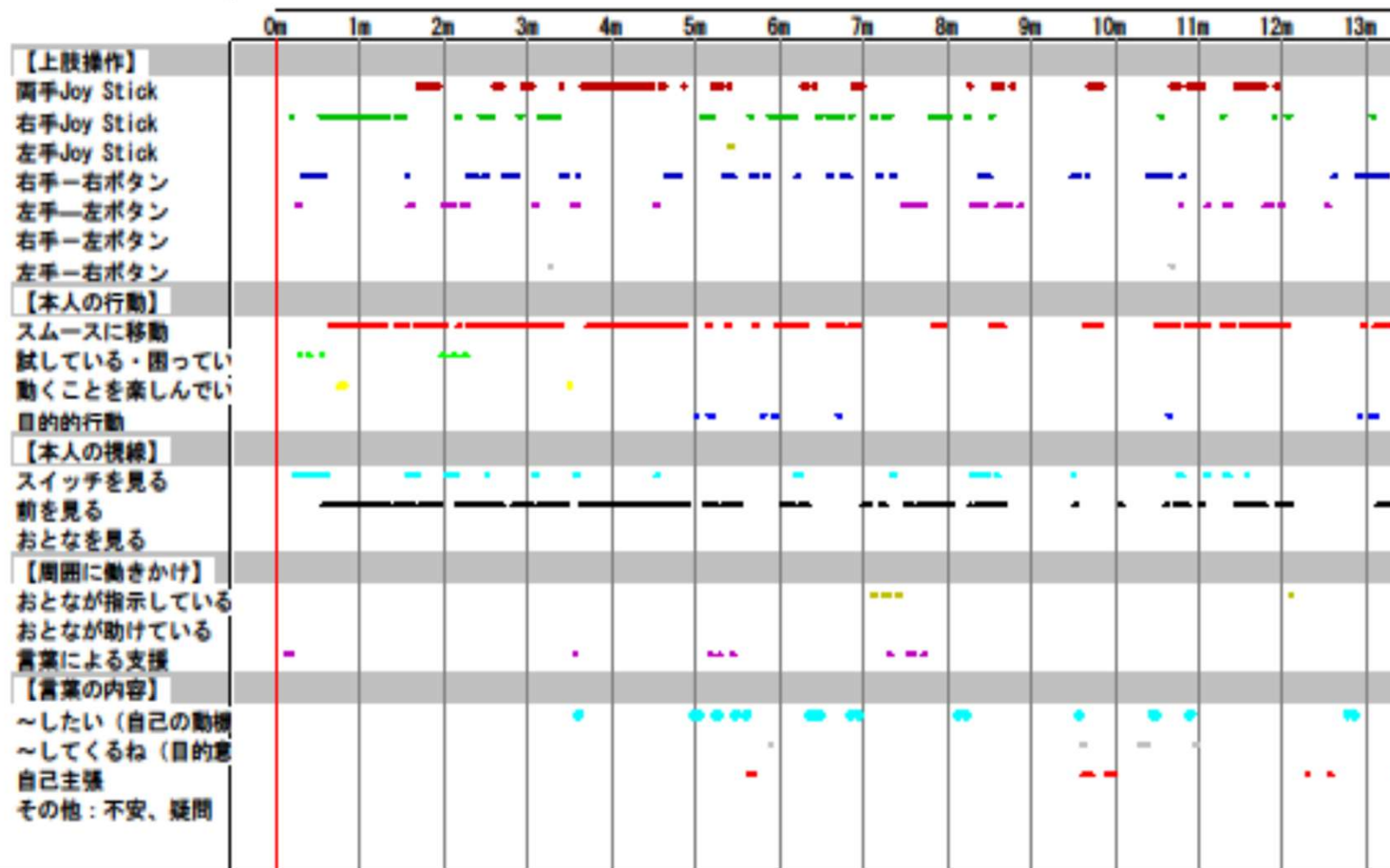
Yuki PMD Session 3・10



Behavior coding Session 1



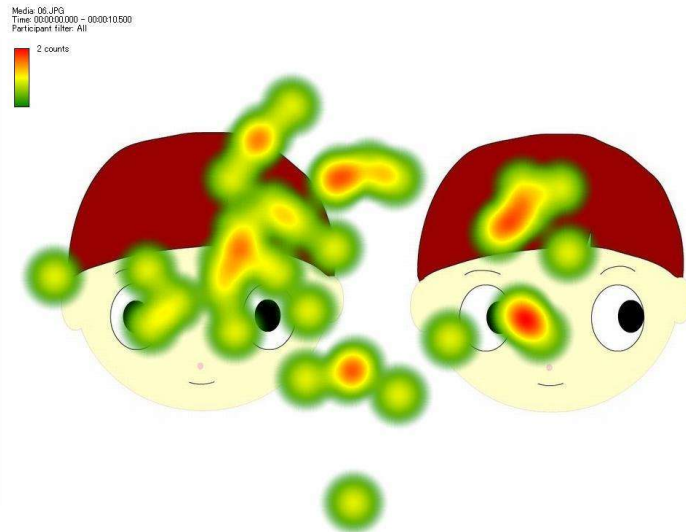
Behavior coding Session 10



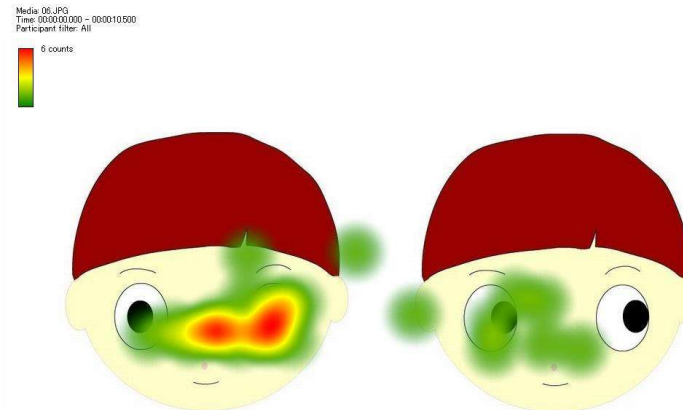
Tobii Eye Tracker

Preferential looking method

HEAT MAP PMD SESSION 1



HEAT MAP PMD SESSION10



UNI-ONE × PCSS

移動経験を通して姿勢制御が組織化される



身体の“気づき”を育てる新しいモビリティ

KIDS LOCO PROJECT 共同代表 高塩純一

UNI-ONEは、肢体不自由のお子さんの“自分で動く力”を引き出すモビリティになりえますか？

自己移動の楽しさ

姿勢の安定と自由度の両立

PCSSを統合することで「姿勢の気づき」を学習できるのでは？

PCSS
(Postural
Control
Support
System)は、
“姿勢を支える”
のではなく“姿
勢に気づく”た
めの仕組みです。

- ・板バネ(第二の脊柱)の役割
(板バネの軸はTh8~S2)

- ・ラバーバンドの張力による
「戻される感覚」

- ・背もたれをバケット形状にすることで
安心感と情報伝達を両立すること

- ・「傾く → しなる → 戻る → 気づく」

ベルンシュタイン 「デクステリティ」

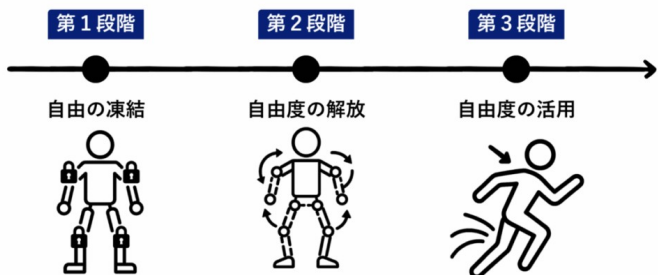
・旧ソビエトの科学者であるベルンシュタインの「デクステリティ」という概念は、「運動の自由度」問題であります。

・肢体不自由の子ども達の動きを観察していると、関節運動の自由度の凍結と開放で考える必要があります。

・自由度を凍結させて新たな動きを獲得させた時、それは「新規な動きの獲得」と呼んでよいのか。

・この疑問の先にUNI-ONE×PCSSがあるのではないのか。

運動学習の3段階モデル



UNI-ONE × PCSS 開発 コンセプト

UNI-ONE は、「すべての子どもが自分の身体
を感じ、自分らしく動ける世界をつくる」

PCSS は、“姿勢の気づきを生む支持システム”



UNI-ONEを
用いて動きそ
のものを学び
に変える。

お子さんが右に傾いたときの
背もたれの反応。

- ・ 戻される感覚が「自分の身
体の位置」を知らせる。

- ・ 反復することで、その子
なりの中心軸の理解が深まる。

PCSSとは何か？ なぜ必要なのか？

“姿勢を支える”のではなく
“姿勢に気づく”ための仕組みです。

PCSS は、背もたれ内部に組み込まれた板バネ(第二の脊柱)とラバーバンド(左右同側)によって構成されています。



PCSSを用いての Activity



UNI-ONEは、お子さんの“自分で動く力”を引き出すモビリティになりえるのでは？

UNI-ONE は、肢体不自由のお子さんにも安全に、そして自由に移動を楽しめるパーソナルモビリティになりえます。

ただ、UNI-ONE WHILL いずれも「定型発達を経た高齢者」というマジョリティを想定した機器であることは否めません。

深いバケットシートが骨盤を安定させ、優しく包み込みますがUNI-ONE の価値は、単に“安定して座れる”ことだけではないように思われます。

PCSS(Postural Control Support System)が搭載されることで、お子さん自身が“自分の身体の動き”に気づくことができ新しい学習体験を提供できると思います。

「療育とは個々の訓練ではなく、もっと全体的な注意深く計画され実施される 子育てであることもわかってきた」とし、その子育てとは「育つ力を育て」ること…「意欲を育てる」これが「育つ力を育てる」Keyである。

